

いちごの施肥法 (その1)

特に被覆栽培について

農林省野菜試験場久留米支場

本多 藤雄

1. はじめに

最近のいちご栽培は収穫期の前進と、長期多収栽培の方向に進みつつある。品種はダナー、宝交早生、はるのかの3主要品種が中心であるが、ダナー、宝交早生は元来露地栽培用品種で、トンネル早熟、そして株冷蔵、あるいは山上げ低温、電照、さらにジベレリン処理など休眠打破により、人為的にいちごを制御して、収穫の前進をはかる栽培体系が開発された。

一方はるのかは、促成栽培用品種とダナーとの交配から育成され、促成から露地栽培の収穫期を通して、ビニールをかけるだけで何ら処理せずに、長期間連続して収穫できるように育成されたものである。このように品種や作型が複雑であり、また収量も作型で異なるので、施肥量や施肥法が異なるのは当然であろう。

2. 根の伸びと株の生育のバランス

いちごは地上部に果実をつけるものであるが、花芽の分化から開花、開花から成熟と、すべて温度によって果実は生産されるから、ハウスで保温あるいは暖房機で加温すれば収穫は早くなる。

しかし、果実の収量は株の発育によって大きく影響をうけるが、株の発育はさらに根の伸びに大きく左右される。

根の伸びは地上部から見ることはできないので、作型にしても施肥にしても、案外無頓着に考えられている。

第1表 根の伸びと温度

定植日 月日	定植日の温度 ℃	新根の平均伸長 cm	最大伸長量 cm
9. 25	22. 0	4.6	7.2
10. 5	19. 2	7.0	10.2
10. 15	16. 2	4.8	7.2
10. 25	14. 4	2.0	3.2
11. 5	12. 2	0.7	1.8
11. 15	9. 0	0.2	0.5

定植苗を水洗し、水で湿らせた紙で根を包み、室内におき、翌朝断根していない太根について、その伸長を調査した。

第1表はいちごの根の伸びと温度との関係を示したものであるが、根の伸びは20℃前後が最もよく、15℃以下では根の伸長は悪く、10℃以下ではほとんど根は伸びない。

このことは、定植期の適期が否かを意味するものであって、少なくともこの温度のときに、ほ場で根を伸ばすことが大切で、その前に定植を終わる必要がある。

従って定植期は暖地で9月下旬、温度が低いところではさらに早い定植が必要で、10月中旬以降に定植する場合は、収量をあげることは不可能であり、少なくとも長期どりで4~6トン/10a以上を目標とすることは困難で、短期でせいぜい3トン以下しか収穫できないであろう。

理想としては適期に定植して、出蕾(らい)が認められてからビニール被覆するのが、根の伸長、株の生育、そして果実の肥大成熟のバランスがとれた姿となろう。

3. 促成長期どり栽培の施肥の考え方

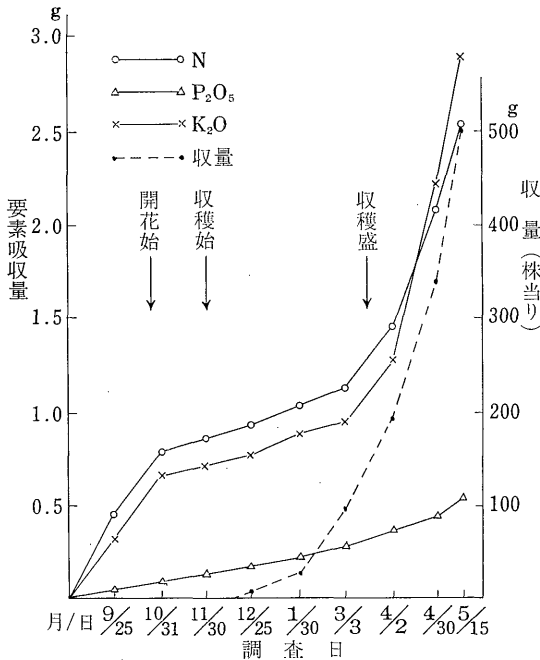
促成長期どり栽培とは、11月から5月まで収穫する栽培である。その際の肥料の吸収状況を図示すると第1図の通りである。

窒素と加里の吸収は開花期から吸収が増加し、収穫盛期からさらに増大する傾向がみられ、収穫後期まで増加し続けるのに対し、りん酸は収穫までわずかずつではあるが吸収し続ける。

目次

- § いちごの施肥法(その1).....(2)
特に被覆栽培について
農林省野菜試験場久留米支場 本多 藤雄
- § 富山米の今昔.....(4)
富山県経済連食糧部長 早水 勝之
- § 加工用きゅうりの栽培(契約)と施肥.....(6)
東海漬物製造(株)園芸技術研究農場長 富岡 芳雄
- § 淡路たまねぎの生育と貯蔵性について.....(8)
兵庫県三原農業改良普及所 木村志津馬
- § 境町レタスの団地化について.....(10)
茨城県境町農業協同組合 北島 作治
- § 私はこう思う.....(12)
「園芸相談」の利用と協力について
名古屋営業所 近本 明雄
- § 営業所めぐり:その3
農産物増産への協力を強調する.....(14)
堀田(大阪営業所)さんの情熱
- § 干ばつ被害 894 億円.....(9)
- あとがき.....(10)

第1図 はるのか促成長期どり栽培の収量と肥料の吸収経過 (圖試久留米1970)



窒素や加里の吸収の多くなる開花始は、定植して1カ月後であるため、肥料の吸収が比較的早くから行なわれるので、早くから肥効があらわれるように肥料の種類あるいは元肥の施用を考える。

硫酸、CDUを用いて行なった試験結果から考えると、第2図のようにCDU化成、硫酸は6~12kg/10a、CDU単体は18kg/10aですぐれたが、かん水した場合は硫酸、CDU単体とも8kg/10aでよかった。

いちごは肥料に対する抵抗性が弱く、電気伝導度(1:5)で0.7ミリモーで根の伸びが抑えられ、一時的に生育が抑えられ、障害なく順調に伸びるのは0.3~0.5ミリモーであるので、伝導度のあがりやすい肥料はさけ、また元肥に多肥することは好ましくない。

長期栽培であり、肥料の吸収状況から考えると、元肥には緩効性肥料や有機質肥料を中心として、10a当り8~12kg程度とし、追肥は常に新葉の緑色と果実の肥大状況をみながら、液肥として追肥する方がよい。果実の肥大が悪

いのは、肥料が多すぎて葉緑が濃い場合に多く、その時はかん水した方がよい。

液肥は窒素と加里を主体とするが、りん酸が入っても差支えない。施肥量は目標収量10a当り4~6トンとして窒素20~25kg、りん酸15~18kg、加里20~25kgが標準である。

4. 半促成栽培における施肥の考え方

半促成栽培は、一般に水田裏作に栽培されるため、定植期が遅れ、そのためほ場で根が伸長するのは年内は少なく、ビニール被覆後に、株の発育と同時に根の伸長も行なわれ、地温の影響を受けやすく、第3図のように生育初期の肥料の吸収は少なく、開花して果実の肥大期から吸収の増加がみられ、収穫始から窒素、りん酸、加里とも急激に増大し収穫の終りまで続く。(第3図は次号に)

すなわち、年内の吸収はわずかであり、春先以降吸収が多いので、追肥を中心の考え方になるが、定植してビニール被覆までに数カ月あり、その間は露地条件と同じであるので、降雨による肥料の損失を考慮しなければならないので、雨による肥料の損失の少ない緩効性肥料や有機質肥料を中心に元肥に施し、マルチやビニール被覆直前に追肥として施すか、あるいはビニール被覆後、液肥を中心とした追肥を数回に分けて施す。(この項続く。)

第2図 促成長期どりいちごの施肥と、かん水の効果 (圖試久留米 1968-69)

